店長はどうやら体調が悪い。

成人向

circle:THE HYPERMAN

「今日はどうしました？」
「なんだか熱っぽい…ような」
そう言った杏〇を医者の男はヒョイと抱き上げ、自分の膝に乗せた。
「お…おい！」
驚いた杏〇は身をよじるが、医者は構わず杏〇の身体をまさぐり始める。
「触診しなければなりませんので…」
医者はそう言うが、ほとんど病院に来ることも無い健康体だった杏〇はそれが間違っていると断言できないでいた。
「病院に慣れてなくてな…こういう…もんか」
そう言って、杏〇は医者に身を任せた。

「唾液の検査もしないと」
医者はそう言って、杏〇にグイッと顔を近付けた。
「な…なにを」
「唾液を口で検査しないといけません」
医者は大真面目に言っている。
「口で…って」
「ちゃんとした検査なので、安心してください」
杏〇は狼狽するが、医者の言葉を信じて
渋々ながら口を許した。
医者はねちっこく杏〇の口に吸い付き
唾液をすすった。

「一応尿の検査もしましょう」
杏○を机に座らせ、強引に股を開かせる。
「ちょっ!?」
「尿には様々なものが含まれてまして…」
医者が説明を始める。
「こういったところで尿を出すのは
慣れていらっしゃらないと思いますので
私がお手伝いしますね」
そう言って下着をめくり、杏○の秘部に
吸い付いた。
「なっ…!」
杏○は尿道付近を執拗に舐め回され、
ついには医者の口内に尿を放出して
しまう。
ゴクゴクと喉を鳴らし、飲み干した後は
「キレイにしておきますね」
と言いながら、尿道だけでなく膣にも
舌をねじ込み体液をすすった。

「そこのバーにつかまってもらえますか」
医者はそう言い、おもむろに杏〇のスカートに手を入れて下着をずり下ろした。
「な…何を」
「その機械で身体の中の写真を撮るんですが
その際に動いてしまう人がいるので」
そう言って、杏〇の尻に顔をうずめた。
「私が…ここを抑えておきますので」
医者がモゴモゴと喋り、杏〇の身体がピクンと跳ねる。
「動かないでくださーい」
病院に慣れていない杏〇は初めてのことばかりで戸惑いつつも、おとなしく医者に従った。

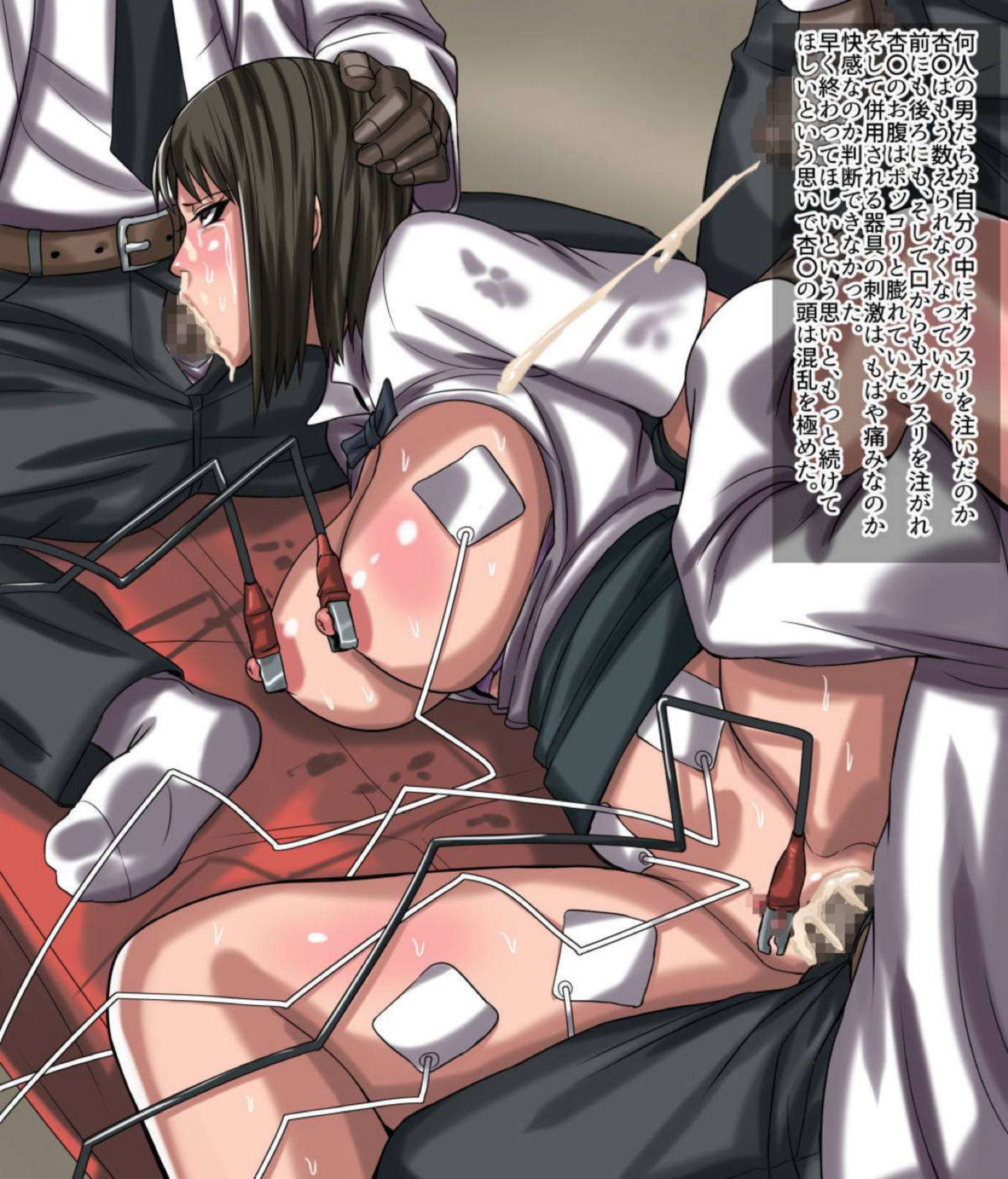
「血圧も計っておきましょうね」
医者はそう言って、杏〇を椅子にベルトで
固定した。
そして様々な器具を杏〇の身体に取り付けて
いく。
「それじゃあいきますよー」
医者が器具に電源を入れた瞬間、杏〇の身体に
今まで感じたことのない刺激が駆け巡った。
「あっ！んんんん！！」
「がんばってください、もう少しで終わります
からねー」
そう言いつつ、数十分はそのまま刺激を与えられ
続け杏〇の下着はグショグショに濡れてしまって
いた。

「検査の結果ですが、白藤さんの身体に様々な毒素が溜まってしまっているのでそれが熱を出す原因になっているようです」
そう言って、杏◎の身体はヒョイと持ち上げられそれと同時に数人の白衣の男たちが部屋に入ってきた。
「我々が全力で毒素を吸い出しますからね」
男たちは次々と杏◎の膣に口を押し付け先に装着していた器具によって溢れてくる体液を音を立ててすすった。
「ちょっ…待っ」
「どんどん溢れてきますね、そのぶん毒素が溜まっているということですから」
器具の出力が上げられ、体液はさらに多く分泌されそれが吸い出し切られることはなかった。

「ホントにこんなとこから…薬なんて出るのか…？」
半信半疑ながら、杏○は男たちの股間から生えるソレを口に含んでいた。
「我々は医者ですからね、ちゃんとオクスリが出せるんですよ」
「ん…んむ」
「そろそろ出ますよー」
どろりとしたオクスリが杏○の口内そして腸内に出されていく。
「美味くは…ないな」
「白藤さんには必要なものですので最後まで吸い出してくださいね」
そう言われ、健気にちゅうちゅうとオクスリを吸い出していた。

「こちらの粘膜にもお薬は効果がありますから
たっぷり注いでおきますねー」
杏○は妊婦のような姿勢で拘束された。
今度は十人を超える多くの男たちが順番に杏○の
中にオクスリを注ぎ、杏○の身体を堪能していた。
「ほ…ホントに薬…なんだよな」
「そうですよー我々は医者ですからね」
全てはその言葉で片づけられていたが、杏○には
十分だった。
「その…カメラ…んっ…は」
膣を突かれながら、男の持つビデオカメラに目を止めた。
「お薬を処方する時は記録が必要なんですよ」
そう言って、ビデオを回し続ける。
「そう…なのか、仕方ない…な」

「こちらの器具も使いますねー」
イボの付いた太い棒状のものを医者が取り出した。そしてそれを杏○の膣に押し込んだ。
「やっ…入らな…」
しかし少々きつくはあったが、案外すんなりと杏○の膣はソレを受け入れた。
そして医者はもう一つの器具、市販の電動マッサージ機に見えるがそれを杏○のクリトリスに押し付け、イボの付いた器具は勢いよく前後に動かされ膣を刺激する。
ヌルヌルに湿った杏○の膣から、男たちの注いだオクスリがかき出される。
杏○は刺激で身体を跳ねさせ、幾度となく絶頂に達した。
しかし医者の男はそれに構うことも無く淡々と器具の前後運動を続けた。


何人の男たちが自分の中にオクスリを注いだのか
杏○は数えられなくなっていた。
前にも後ろにも、そして口からもオクスリを注がれ
杏○のお腹はポッコリと膨れていた。
そしてポッコリと膨れた。
快感は、もはや痛みなのか
早く終わってほしいと思いつつ、もっと続けてほしいという思いは、
ほしいと思ってしまっていた。
杏○の頭は混乱を極めた。

杏○の膣からドロリと大量のオクスリが溢れる。
杏○は考えるのを止め、眼前に差し出された男のモノを咥え出されたものを抵抗なく飲み続けた。
医者がやってること、ということで自分を納得させた結果だった。
腹はパンパンに膨れ、時折尿も我慢できずに排出していた。
それを見た男たちはさらに股間のモノを固くし、
杏○にオクスリを注いだ。

「あ…う…」
治療行為の終わった杏○は
頭に機械を装着された。
「熱が…あっ…て」
杏○はその特殊な機械により
偽りの記憶を上書きされていた。
今までのオクスリを注入された記憶ではなく
何の変哲もないごく普通の診察を受けた記憶である。
身体は調教され、刺激に喜ぶように
変えられてしまったが杏○はそれに気付かない。
しかしまた、杏○の意識は知らず知らずのうちにこの病院
に向くようになる。
少しでも体に違和感を覚えればここに来院し
医者たちに処置を受け、また日常に戻るのである。

「今日はどうしました？」
「なんだか熱っぽい…ような」
そう言った杏〇を医者の男はヒョイと抱き上げ、自分の膝に乗せた。
「お…おい！」
驚いた杏〇は身をよじるが、医者は構わず杏〇の身体をまさぐり始める。
「触診しなければなりませんので…」
医者はそう言うが、ほとんど病院に来ることも無い健康体だった杏〇はそれが間違っていると断言できないでいた。
「病院に慣れてなくてな…こういう…もんか」
そう言って、杏〇は医者に身を任せた。

「唾液の検査もしないと」
医者はそう言って、杏〇にグイッと顔を近付けた。
「な…なにを」
「唾液を口で検査しないといけません」
医者は大真面目に言っている。
「口で…って」
「ちゃんとした検査なので、安心してください」
杏〇は狼狽するが、医者の言葉を信じて
渋々ながら口を許した。
医者はねちっこく杏〇の口に吸い付き
唾液をすすった。

「一応尿の検査もしましょう」
杏○を机に座らせ、強引に股を開かせる。
「ちょっ!?」
「尿には様々なものが含まれてまして…」
医者が説明を始める。
「こういったところで尿を出すのは
慣れていらっしゃらないと思いますので
私がお手伝いしますね」
そう言って下着をめくり、杏○の秘部に
吸い付いた。
「なっ…!」
杏○は尿道付近を執拗に舐め回され、
ついには医者の口内に尿を放出して
しまう。
ゴクゴクと喉を鳴らし、飲み干した後は
「キレイにしておきますね」
と言いながら、尿道だけでなく膣にも
舌をねじ込み体液をすすった。

「そこのバーにつかまってもらえますか」
医者はそう言い、おもむろに杏〇のスカートに手を入れて下着をずり下ろした。
「な…何を」
「その機械で身体の中の写真を撮るんですが
その際に動いてしまう人がいるので」
そう言って、杏〇の尻に顔をうずめた。
「私が…ここを抑えておきますので」
医者がモゴモゴと喋り、杏〇の身体がピクンと跳ねる。
「動かないでくださーい」
病院に慣れていない杏〇は初めてのことばかりで戸惑いつつも、おとなしく医者に従った。

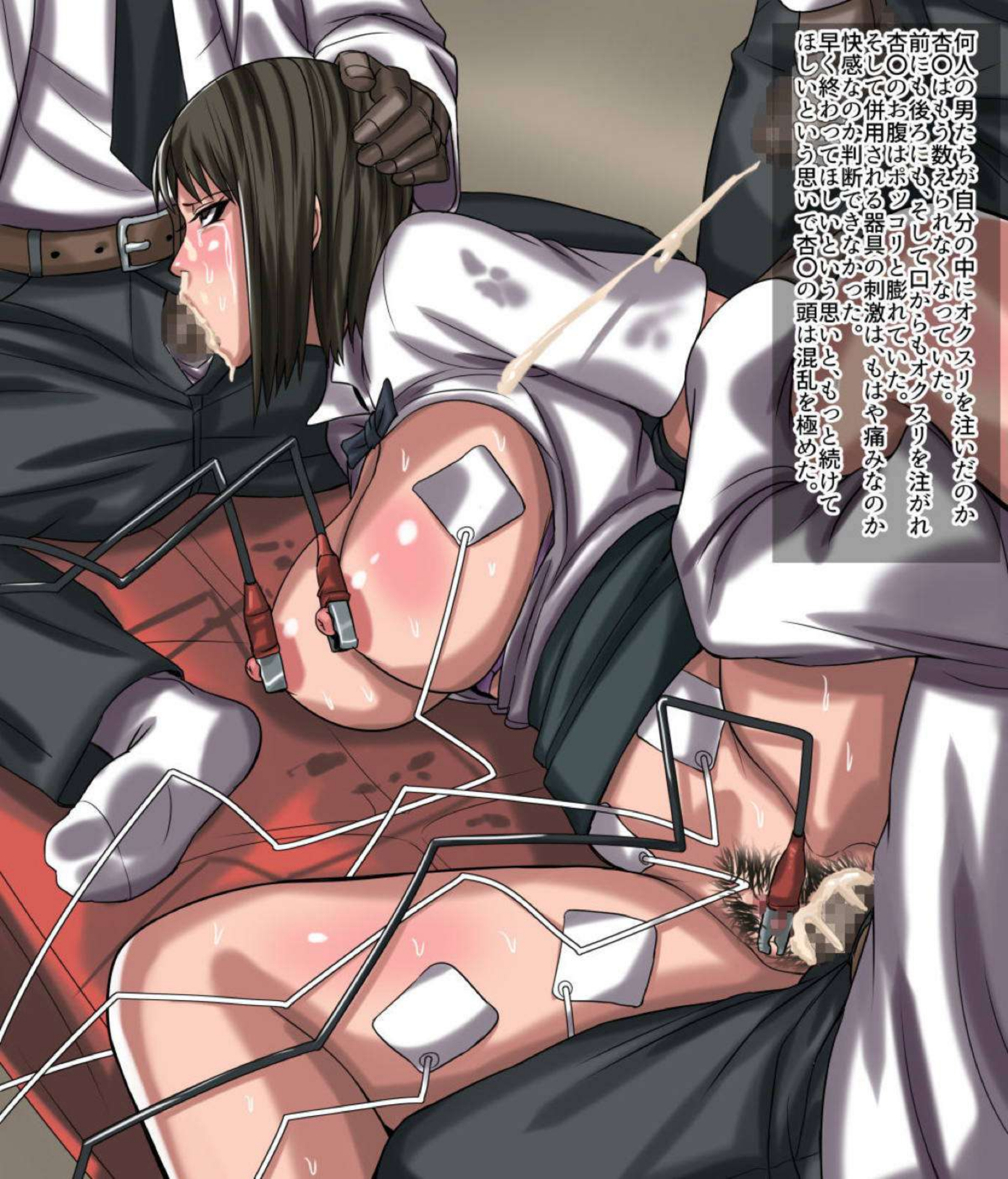
「血圧も計っておきましょうね」
医者はそう言って、杏〇を椅子にベルトで
固定した。
そして様々な器具を杏〇の身体に取り付けて
いく。
「それじゃあいきますよー」
医者が器具に電源を入れた瞬間、杏〇の身体に
今まで感じたことのない刺激が駆け巡った。
「あっ！んんんん！！」
「がんばってください、もう少しで終わります
からねー」
そう言いつつ、数十分はそのまま刺激を与えられ
続け杏〇の下着はグショグショに濡れてしまって
いた。

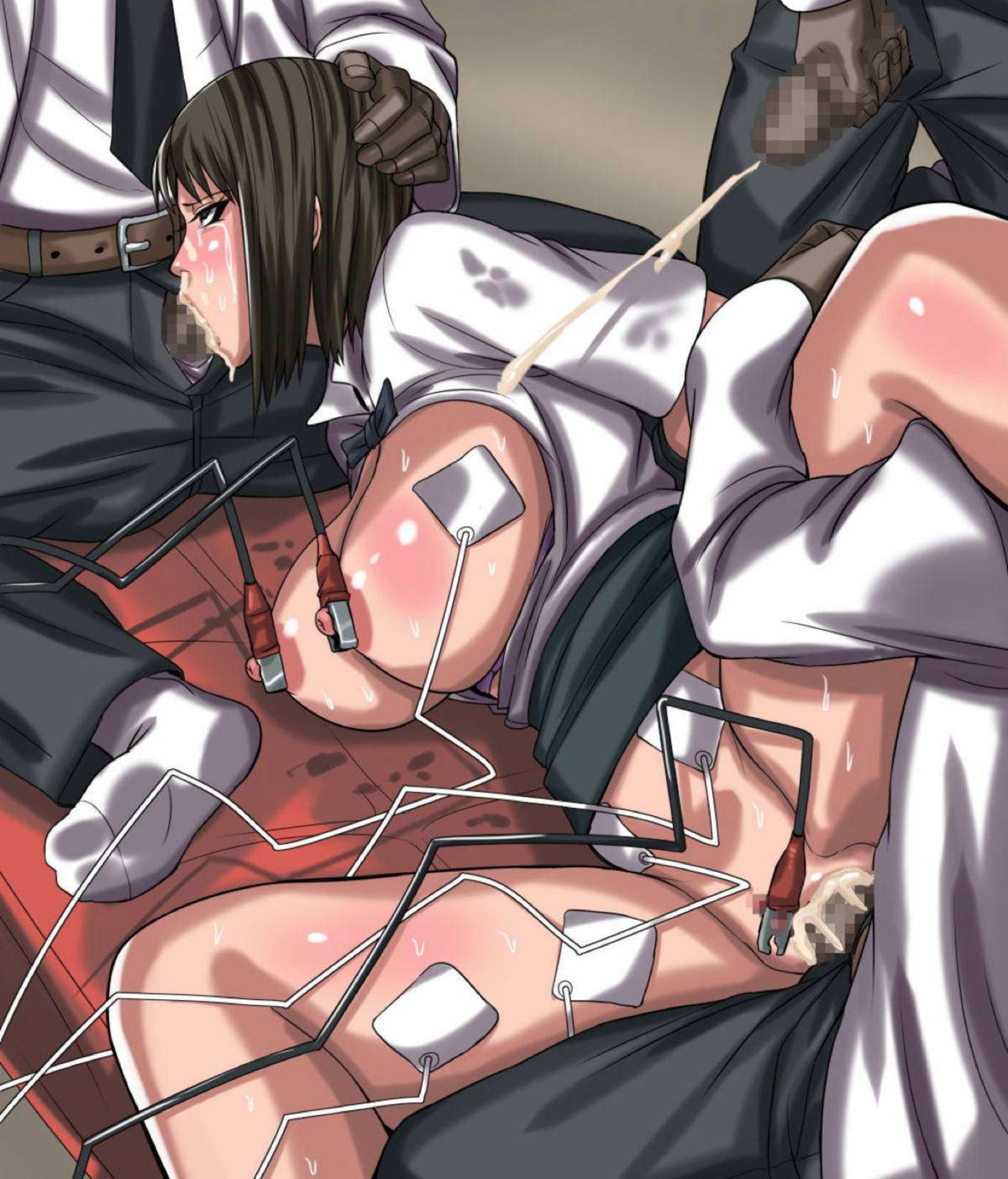
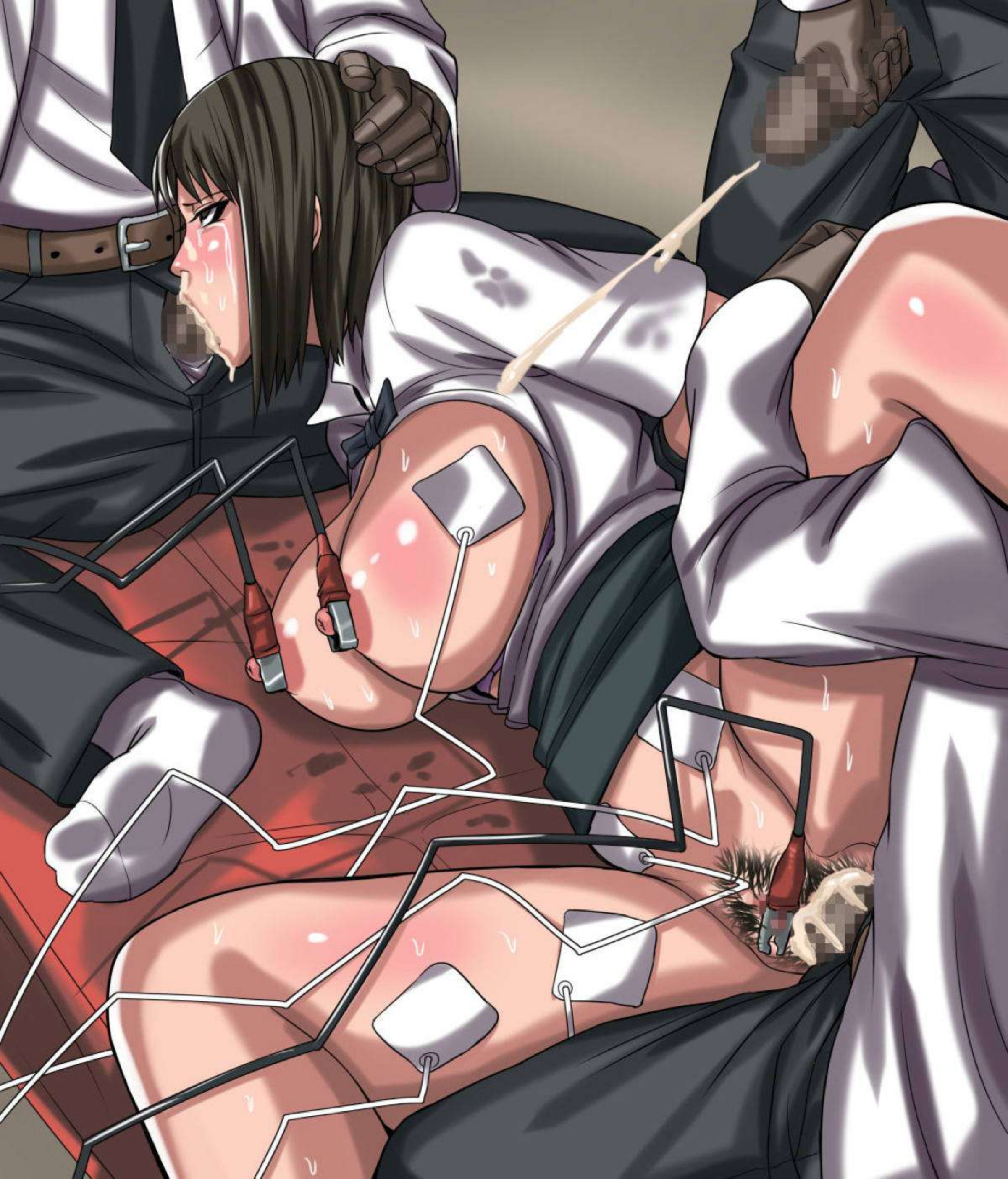
「検査の結果ですが、白藤さんの身体に様々な毒素が溜まってしまっているのでそれが熱を出す原因になっているようです」
そう言って、杏◎の身体はヒョイと持ち上げられそれと同時に数人の白衣の男たちが部屋に入ってきた。
「我々が全力で毒素を吸い出しますからね」
男たちは次々と杏◎の膣に口を押し付け先に装着していた器具によって溢れてくる体液を音を立ててすすった。
「ちょっ…待っ」
「どんどん溢れてきますね、そのぶん毒素が溜まっているということですから」
器具の出力が上げられ、体液はさらに多く分泌されそれが吸い出し切られることはなかった。

「ホントにこんなとこから…薬なんて出るのか…？」
半信半疑ながら、杏○は男たちの股間から生えるソレを口に含んでいた。
「我々は医者ですからね、ちゃんとオクスリが出せるんですよ」
「ん…んむ」
「そろそろ出ますよー」
どろりとしたオクスリが杏○の口内そして腸内に出されていく。
「美味くは…ないな」
「白藤さんには必要なものですので最後まで吸い出してくださいね」
そう言われ、健気にちゅうちゅうとオクスリを吸い出していた。

「こちらの粘膜にもお薬は効果がありますから
たっぷり注いでおきますねー」
杏○は妊婦のような姿勢で拘束された。
今度は十人を超える多くの男たちが順番に杏○の
中にオクスリを注ぎ、杏○の身体を堪能していた。
「ほ…ホントに薬…なんだよな」
「そうですよー我々は医者ですからね」
全てはその言葉で片づけられていたが、杏○には
十分だった。
「その…カメラ…んっ…は」
膣を突かれながら、男の持つビデオカメラに目を止めた。
「お薬を処方する時は記録が必要なんですよ」
そう言って、ビデオを回し続ける。
「そう…なのか、仕方ない…な」

「こちらの器具も使いますねー」
イボの付いた太い棒状のものを医者が取り出した。そしてそれを杏○の膣に押し込んだ。
「やっ…入らな…」
しかし少々きつくはあったが、案外すんなりと杏○の膣はソレを受け入れた。
そして医者はもう一つの器具、市販の電動マッサージ機に見えるがそれを杏○のクリトリスに押し付け、イボの付いた器具は勢いよく前後に動かされ膣を刺激する。
ヌルヌルに湿った杏○の膣から、男たちの注いだオクスリがかき出される。
杏○は刺激で身体を跳ねさせ、幾度となく絶頂に達した。
しかし医者の男はそれに構うことも無く淡々と器具の前後運動を続けた。


何人の男たちが自分の中にオクスリを注いだのか
杏○は数えられなくなっていた。
前にも後ろにも、そして口からもオクスリを注がれ
杏○のお腹はポッコリと膨れていた。
そしてお腹はポッコリと膨れていた。
快感なのか判断できなかった。
早く終わってほしいという思いと、もっと続けてほしいという思いは、もはや痛みなのか
杏○の頭は混乱を極めた。

杏○の膣からドロリと大量のオクスリが溢れる。
杏○は考えるのを止め、眼前に差し出された男のモノを咥え出されたものを抵抗なく飲み続けた。
医者がやってること、ということで自分を納得させた結果だった。
腹はパンパンに膨れ、時折尿も我慢できずに排出していた。
それを見た男たちはさらに股間のモノを固くし、
杏○にオクスリを注いだ。

「あ…う…」
治療行為の終わった杏○は
頭に機械を装着された。
「熱が…あっ…て」
杏○はその特殊な機械により
偽りの記憶を上書きされていた。
今までのオクスリを注入された記憶ではなく
何の変哲もないごく普通の診察を受けた記憶である。
身体は調教され、刺激に喜ぶように
変えられてしまったが杏○はそれに気付かない。
しかしまた、杏○の意識は知らず知らずのうちにこの病院
に向くようになる。
少しでも体に違和感を覚えればここに来院し
医者たちに処置を受け、また日常に戻るのである。